simC News Letter
Sendai International Music Competition
2025年5月27日号
仙台国際音楽コンクールニュースレター
第9回仙台国際音楽コンクール【開催日程】ヴァイオリン部門 2025.5.24（土）～ 6.8（日） ピアノ部門 2025.6.14（土）～ 2025.6.29（日）

第9回仙台国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門レポート

予選 3 日目　2025 年 5 月 26 日（月）

音楽ジャーナリスト：正木 裕美

予選 3 日目は 12 名が出場した。この日もモーツァルトで管弦楽を務めた仙台フィルハーモニー管弦楽団 2 グループと山形交響楽団は、3 日間で 1 グループあたり 12 回、演奏を行ったことになる。伸びのびと出場者が自身の音楽を表現できるのは、両オーケストラの強力なサポートの賜物だろう。
本来、日によって明確な傾向があろうはずもないが、3 日目はより個性や音楽との向き合い方が如実に表れた。オーケストラを背景にソリスト然として舞台に立つ者、ダンスをするように演奏の歓びを発露させる者、作品と協演者に最大の敬意を払い、音楽を慈しむ者――演奏家としての信条はひとそれぞれで、それを観るのもまた楽しい。また次のラウンドへと選ばれる出場者を見れば、求められる演奏家像が見えてくる。ここからは、次々と繰り出された興味深い演奏の様子を、出場順にレポートしたい。

シン・ジェイク・ドンヨン（韓国）のイザイは全体的に技術的な要素を的確に捉えておらず、曖昧な重音、ムラなピツィカートなど、雑な扱いが散見された。第 2 楽章では音価を保たず切り気味で、譜面への理解が今一歩及んでいない。ロンドもスタッカート気味で、フレーズの終わりまで意識が感じられず、スラーの不採用など、独自の解釈も目立った。

リュウ・ティェンヨウ（中国）は終始独自の音楽を強烈に貫く演奏。イザイでは独特な節回しでテンポの変化を伴わず、譜面を追う事に集中していた。自身の指揮により始まったアダージョは四分音符＝30 以下に感じるほど遅く、また構成への配慮は感じられない。重心をぐっと抑えたロンドはオーケストラの 2 歩ほど前へ出て、孤独にソリストを務めた。

ヴィルモシュ・チコシュ（ベルギー／ハンガリー）はイザイを超絶技巧の作品と捉えず、ヴァイオリンのポテンシャルと繊細さを秘めた「美しい作品」として奏でた。それを表現するための技巧も申し分ない。アダージョでは素直な音色で極めて繊細なアーティキュレーションを使い分け、ロンドでは落ち着いたテンポで慈しむように作品のつくりを明らかにする。オーケストラとのアンサンブルを心から楽しみ、またモーツァルトの音楽への愛情と敬意がにじみ出ていた。

ジャン・アオジュ（中国）のイザイも技巧的に余裕があり、無理な力をかけず、使わず、また先を見据えて構成していた。アダージョはスッと立ち上がった音色で落ち着いて作品を構築し、様式感を踏まえた演奏。ロンドは端正で旋律間の対話を意識し、作品分析に長けた印象を持った。

フィオーナ・キサラ・イヨク（アメリカ／日本）は弓を大きく動かしたダイナミックな演奏。イザイ第 1 楽章では前半でゆったりと歌い、対比的に後半の鮮やかなクライマックスを築いた。第 2 楽章は踊りを意識した躍動感があり、やはり一気呵成に鮮烈なラストを飾った。モーツァルトは力強く抒情性を前面に出した演奏。ややハスキーな音色でイザイと差がなく、微妙に低い音程が気になった。

裏面に続く

■お問い合わせ／公益財団法人 仙台市市民文化事業団　仙台国際音楽コンクール事務局
〒981-0904 仙台市青葉区旭ケ丘3-27-5 Tel:022-727-1872 Fax:022-727-1873 Email:info@simc.jp URL:https://simc.jp

ワン・ダンダン・ジンフェイ（中国）のイザイは弱音による技巧的パッセージでも芯を捉えて美しく奏でる。折り目正しい第 2 楽章を奏でたが、その分ややリズムが停滞したか。音色もやや鋭い印象を持った。アダージョでは繊細な情感や滑らかな音色を色彩豊かに表出させたが、ロンドは特定のリズムでオーケストラとの齟齬が生じてしまい、また全体の構成が平坦に感じられた。

リアン・マガウアン（オーストラリア）のイザイ第 1 楽章は緩急巧みで洒脱。第 2 楽章は流麗さと軽快さを併せ持つ「踊り」として、大きな身体表現とともに楽しげに奏でた。アダージョは音楽への没入度が高く、細やかなフレーズを意識してアンサンブルへと溶け込み、室内楽の歓びを発露させた。ロンドは軽やかさを強調するあまり強拍が曖昧になってしまい、オーケストラと合わず空回りしてしまった。

第 7 回 6 位のコー・ドンフィ（韓国）は満を持しての参加だろうか。的確な音程、高度な技術で鮮やかにイザイを奏でた。第 2 楽章は拍節感を強調し、重心の低さと軽やかさの対比を聴かせた一方、時折、その重さが独特なリズム感を放っていた。モーツァルトでは過度にロマンティック、軽やかにならずに様式感を意識し、細部に通底している。トゥッティ（総奏）では指揮に転じ、思い描く音楽へのこだわりを見せた。

ウー・シーユエ（中国）は熱量の多いイザイを奏で、それを表出させるテクニックと持続性を持ち合わせる。過度な情感の発露に走らず、構成を端正に追う冷静さも併せ持っていた。モーツァルトでは流麗さと軽やかさを使い分け、発音はクリアでハッキリとした音質。ロンドでは長い音価を情感たっぷりに鳴らしつつ、オーケストラと颯爽と走駆し闊達なアンサンブルを繰り広げた。

的場桃は音楽の構築力、抜群の音楽センス、大胆な弓使いによる高いテクニックを備える。イザイ第 2 楽章では推進力の中に自在な伸縮性を見せ、音の張りや響きを保ったまま一気呵成にクライマックスを築いた。モーツァルトは柔らかさよりも凛とした強さが表出され、アダージョに見られた繊細な翳り、ロンドで聴かせた快活さと的確さなど、日本人らしいモーツァルトを奏でた。

ズィー・ヤン・ロウ（マレーシア）は難易度の高いテクニックも決然と弾きこなし、歯切れの良いリズムでブレがない。アダージョでは柔和でこっくりとした音色を用い、繊細で優美なモーツァルトを響かせた。一方ロンドではスピーディーな弓使いで身体を左右に大きく揺らし、振幅の大きな音楽を奏でる。ただし集中するまでにかなりの時間を要するようで、演奏がなかなか始まらず、構えてずっと待っていたオーケストラは気の毒だった。

リ・ジンジュ（中国）のイザイはテクニックに偏向気味で発音に統一感がなく、第 2 楽章終盤のプレスト以降は引き飛ばしている感があった。アダージョでは音色をガラリと変え、訥々と旋律を繋ぎながら静けさと歌心を欠かない。ロンドでは構成を明確にしつつ軽やかにアーティキュレーションを駆使し、快活なアンサンブルを奏でた。2 度のミスが目立ってしまったのが悔やまれる。